

# 保育者養成における歌唱指導の導入

～動物の鳴き声を真似することからの試み～

The introduction of singing leader in childcare Training

～Attempts from that imitate animal sounds～

松田扶美子（有明教育芸術短期大学）

Fumiko MATSUDA (Ariake College of Education and the Arts)

（要旨）

子どもをとりまく環境には自然の音、乗り物の音、動物や虫の鳴き声など様々な音があふれている。それぞれの音に関心を持ち、頭の中でイメージし、声を出す、そこから音楽が始まる。保育者養成校における授業の中で音楽、特に歌唱指導は重要な位置を占める。「わらべうた」「手遊び」「ペーパースート」「エプロンシアター」「音楽劇」「ピアノの弾き歌い」「絵本の読み聞かせ」など、あらゆる場面で声を使う。しかし、一度声をこわすとなかなか戻らないというのが現状である。

本研究では養成校における学生の歌唱についての問題点を探り、身体、声の使い方をスムーズに知る為、導入として動物の鳴き声を真似し、声を出すということで学生にどのような変化があるか、探ることを目的とする。

（キーワード）

歌唱指導、音楽教育、保育者養成、動物の鳴き真似

## 1. 問題の所在と背景

保育者養成における歌唱指導において、子どもの歌の歌い方で重要なことは、響きがありながら息の流れに言葉・声をのせることである。クラシックのベルカント唱法とも合唱の歌い方とも歌謡曲とも異なる。このことが理解されないまま、言葉をはっきりと、大きな声で歌いましょう、という声かけを保育の現場で安易にかけることが多いと思われる。その結果、子どもたちは大きな声で歌い、どなり、耳をふさぎながら歌っているということもある。保育者は子ども達への声掛け、歌う、声を出して注意するなど一日中繰り返し、喉を酷使し、ついには声のトラブルを起こしてしまうということもある。これらのことから小学校では発声を教えている学校も

あり、地声から裏声へ幼児期の発声を変えるため、1年を要する場合もある。このような現状をどうとらえ、対処していくべきか。保育者養成校の学生へ質問紙調査をおこない、どう対処していくか探ることを目的とする。音楽の知識を使わず、動物の鳴き声の真似を歌唱導入として取り入れることに着目し、各自に合った発声指導を行い、考察していく。

## 2. 子どもの声域、年齢別歌唱行動及びきく活動の特徴

声帯の長さは表1から分かるように幼児から変声期まで大きく変化し、とてもナイーブであり、変わりやすい。声帯の幅が増すにつれて声を出せる音域も増す。幼児・児童の声帯の発達及び音域の変化に

ついて以下に記す。

表1 幼児、児童の声帯の発達及び音域の変化

年齢	声帯の幅	音域
3・4才	5~6mm	一点二~一点イ
5・6才	6~7mm	一点二~二点二
7・8才	9~10mm	一点ハ~二点ホ
11・12才	10~11mm	ロ~二点ヘ
変声後 女子	12~15mm	イ~二点ト
変声後 男子	14~21mm	と~一点ヘ

(参考：声楽教本 小学校課程・幼稚園課程・保育士養成課程 2015)

表2 年齢別の歌唱行動の特徴

月齢・年齢	特徴
12~18ヶ月	声をいろいろ発して遊ぶ。
19ヶ月	声をいろいろ発する。その中にはメロディーを伴うものやリズムを感じさせるパターンなどが現れる。
19ヶ月~24ヶ月	短い自発的な歌を自由に歌う。それはしばしばメロディーを感じさせ、柔軟性のある臨機応変なリズムパターンを伴う。
2歳	自発的に歌う中で学んだメロディーのパターンを用いる。歌の一部分を歌うことができるようになる。
2歳半~3歳	歌全体を正しく歌うことはできないが、歌の模倣をするようになる。
4歳	歌全体を一続きに歌うことができるようになる。歌詞、リズム、フレーズ、メロディーの輪郭線の理解。
5~5歳半	音高の感覚が安定し正確に学べばほとんどの歌を歌うことができるようになる。

(出典：幼児のための音楽教育 教育芸術社)

表2からわかるように2歳半からは歌の模倣をするようになる。これと同時に表3のようにきく活動の発達は2歳児から繰り返して喜び。また3歳児以降は音楽に親しみ、自分の好きな曲を喜んできくことができるようになるという発達が見られる。

表3 きくことの発達

時期	発達の内容
胎児	・母親の胎内にいる時から、胎盤を通じて母親の拍音や声がきこえている。 ・様々な機能の中で、聴覚感覚が最も早く発達している。
新生児	・周囲の音や声にとっても敏感になる ・家族の声化他人の声を判断したり、ことばの聞き分けをするようになる。 ・母親の声に似ている高音には安心感を持つ。
生後2~3ヶ月	・泣き声で自分の要求を表現し、あやす声で笑うようになる。
生後4ヶ月頃	・首がすわり、音のする方向へ顔を向けていく。
生後5~6ヶ月頃	・おすわりができるようになり、母親のうたう声と動きが心地よく感じられるようになる。
1歳児	・母親や保育者の語りかけが大切な時期となる。
2歳児	・音楽をくり返しきいて喜ぶ。
3歳児	・音楽に親しみ、自分の好きな曲を選んで聞くことができる。

(出典：楽しい音楽表現：圭文社)

### 3. 研究の方法

A 短期大学生 1.2年生 62名を対象に質問紙調査及び事例研究を行った。質問項目は3つであった。①「手遊び」「わらべうた」「弾き歌い」「音楽劇」「歌うのみ」のいずれかのうち、声が出しやすい、歌い

やすいと思うものはどれか。②声を出すうえで心がけている事、目指す声はどのような声か。③声が出せる音域はどこまでかであった。3つの質問項目をもとに事例研究として発声に問題がある学生に筆者が考案した表5に示した動物の鳴き声を真似することの効果の具体的な調査を行った。

#### 4. 質問紙調査及び事例研究の結果と考察

表4 質問紙調査①の結果

種類	声が出しやすい・歌いやすいと回答した数（複数回答可）
手遊び	21
わらべうた	12
ピアノの弾き歌い	2
歌うのみ	20
音楽劇の中での歌唱	11

設問①の回答として「手遊び」が一番声が出しやすい、歌いやすいという結果が出た。その次に「歌のみ」であり、「わらべうた」「音楽劇」が続き、この二つはほとんど変わらなかった。「弾き歌い」を選んだ学生は二名であった。「手遊び」は1年時から2年間授業の中で取り上げ続けたこともあり、声が出しやすく、「わらべうた」「音楽劇」は体を動かしながら声を出すため、出しやすいという事であった。

②の設問に対して、心がけていることは高い声なるべく出している。前に向かって声が出せるようにしている。相手に良い印象を与えられるようにしているとあった。目指す声としては以下の通りである。

- ・お腹の底からきれいな声が出したい。
  - ・高い声が出しやすくなりたい。
  - ・透き通ったきれいな声
  - ・気持ちが伝わる声・元気な声
- 特に高い声が出せるようになりたいという回答が多かった。

③から音域は1オクターブと少しの学生が半数を占め、他の半分の学生は2オクターブの音域があることが分かった。人前で歌う経験が豊富な学生は2オクターブであり、3オクターブの学生も3名ほどいた。このことから声の喚声点である一点二、ホの音になると、普段声を出すことが苦手で裏声が出せず地声のまま出せない学生と、裏声を自然に出す学生とに分かれることがわかった。次に事例研究として筆者が考案した表5の動物の鳴き声を真似する活動を行ったところ、色々な問題点が改善された。

表5 色々な動物の鳴き声を真似することの効果

動物	効果
猫の鳴き声	ハミングから響きを集めやすい、息漏れに効果的である。高い声が出る。緊張と弛緩のバランスが良くなる。強弱が自然とつく。
犬の鳴き声	身体に力が入り、息が通りにくい場合に効果的である。声の通りが良くなり、お腹から太い声が出る。四つん這いになることにより足、わき腹に程よい力が入り、声が出しやすくなる。
羊の鳴き声	喉の奥が軽くしまり、言葉が前に出てくる。ポップスの歌い方に近くなり、子どもの歌を歌う場合に効果的である。
カラスの鳴き声	力が入りやすい脇の部分のチカラが抜け、胸郭が広がる。母音スムーズに出て来るようになる。
蟬の鳴き声	母音と母音がつながりやすくなり、響きをつなげることが意識できるようになる。

(参考：有明教育芸術短期大学紀要第9巻)

表5の中の猫の鳴き声は町の中にいる猫の鳴き声を注意するとよくわかる。えさをねだる時の鳴き声は小さく甘くせつない。相手に届く、心に届く声であると感じる。喧嘩をしている声は相手にぶつけるようにして、とても大きく固い声である。四つん這いになり、真似をしてみると背骨が柔らかく、緊張と弛緩のバランスが見事にマッチしている。そのため、あのような小さな体から遠くまで聞こえる声となるのである。人間も本来は声を伝える、思いを伝えるというために声を出し、歌っていたと考える。そのことを動物たちは教えてくれる。頭を使わずイメージすることにより、知識がなくとも声を出すことは可能になる。

## 5. まとめ

よく響く声とは軟口蓋を上げ、舌の付け根を下げ、口の中のスペースを大きくするイメージをもつことが大切である。しかし、一人一人の口の開け方、感じ方は一人一人違い、響く場所も変わる。しかも子どもの歌は音域が狭く、言葉を前に出していかなければいけない。そのことを理解するまでにはとても時間がかかる。歌唱指導において発声・歌唱という流れが一般的であるがそれだけでは身体の硬直は取れず、緊張したまま声を出すということが習慣化し、様々な問題が解決されていないということが考えられる。

質問紙調査から学生の声に関する課題として高い声を出す、お腹の底からきれいに出せるようになる、声の音量を増やしたいなど共通する点が多かったが、事例研究を通して動物の鳴き声を真似をすることでほとんどの学生が問題点を解消できたと考える。大人でも何かになりきったりする場面では多彩な声が使えようになると考えられる。動物の鳴き真似をイメージすることにより、余分な力を使わず、必要などころに力を入れることができ、一人一人に合った動物を知ることにより、様々な問題が解決すると考える。歌唱における喚声点（チェンジ）はとても高度な技術を要するが自然と切り替えられることも

分かった。また、地声から裏声に切り替えるには普段の話声位も重要になり、聞くこと、話すこと、歌うことはつながっているといえる。音痴と思い込んでいる学生もいるがこの方法を用いると解消しやすい。一人一人にアプローチすることで見違えるように声が変わることが分かった。今後はこれらのことをより具体的に研究を進めていきたいと考える。

## 引用・参考文献

- 森田百合子・山本敬・秋山衛(2015)『声楽教本 小学校課程・幼稚園課程・保育士養成課程』教育芸術社 p24
- 神原雅之・鈴木恵津子(2018)『幼児のための音楽教育』教育芸術社 p7
- 奥田恵子・加藤あや子・菊池由美子・清成美・田中常雄・富田英也・平松愛子(2012)『楽しい音楽表現』圭文社 p22
- 松田扶美子(2018)「小学校における音楽科指導法の一考察－歌唱指導に着目して－」有明教育芸術短期大学紀要第9巻 p105
- 萩野仁志・後野仁彦(2017)『「医師」と「声楽家」が解き明かす発声のメカニズム』音楽之友社
- 川井弘子(2017)『うまく歌えるからだの使い方』誠信書房